



白石先生、
質問です!

うちのクラスの子ども達
あまり発言してくれないんです!

もっと積極的になる
いい方法😊はないですか?

子ども達に積極性が見られない、
話し合い活動で発言する子が限られる、
クラスのまとまり感がいまひとつ薄い……。
こんな悩みの解消に「音読活動が効きますよ」と
白石先生が語ります。そのわけとは……。

明星大学教授

白石 範孝 先生



音読活動に力を入れて
みてはどうですか?



「対話」のためには、
声を出す方法を知らないと

一般的に「音読」は、国語学習の中
で大切な活動ととらえられることが
多いと思いますが、実は「音読活動」は、
国語という枠を越えた様々な学習や、
学級づくりなどにも大きく関係して
いるものなのです。

新学習指導要領では、「主体的・対
話的で深い学び」がキーワードになっ
ています。そのため「話し合い活動」
に関心をもっていらっしゃる先生も
多いようです。

そこで聞こえてくるのが、「話し合
い」といっても実際に発言しているの

は一部の児童だけ」「自分の考えを發
言しよう」としない児童がいる」といっ
た悩みです。

これらの原因として、「話し合いに
対する意欲が低いから……」などとと
らえてしまいがちですが、私は必ずし
もそうだとは思いません。子ども達が
「発言」の具体的な方法を身につけて
いないケースが多いのではないかと
考えています。

ご自身のことを考えてみてくださ
い。職員会議や打ち合わせのときに、
発言したいことがあっても、大勢の前
で声を出すことを、ついためらってし
まうことはないでしょうか。

皆さん忘れがちなことですが、「声
を出す」ということも、一つの技能で
あり、能力です。うまくできる子ども
もいれば、苦手だという子どももい
ます。「発言」となればその傾向はさ
らに顕著に現れます。

ところが私たちは、うまく発言でき
ない子どもに対して「もっと声を出し
て」「みんなに聞こえるように」と繰り返
返すだけの指導になってしまいがち
です。

それどころか、うまく発言できない
理由を「意欲が低いから」でかたづけ

子ども達に教えたい「声を出す」ための具体的な方法

● 正しい姿勢で立つ

うつむいたり、猫背になっていたりすると、腹筋がうまく使えません。

● 声を出すときの口の形(口形)を意識する

口の形が正しくないと、発音が不明瞭になってしまいます。



「あ」の口形



「い」の口形



「う」の口形



「え」の口形



「お」の口形



「ん」の口形

● 口を大きく動かす

口の形が正しくても、動かし方が小さいと、声がかもってしまいます。単に「口を大きく開ける」ことではありません。

● 声を届ける相手を意識する

「教室のいちばんうしろ」や「校庭の木」など、具体的な目標物を示して、そこまで声を届けることを意識させます。

てしまったり……。子ども達が活発に発言できるようにするためにまず取り組むべきことは、どんなときにも子ども自身が自信をもって声を出すことができるようにすることです。表面的なことのように思われるかもしれませんが、その自信を獲得するだけで子ども達は(実は大人も)、発言に対する意欲が高まるのです。

では、どうすれば、「声を出す」ことに自信をもつことができるのでしょうか。必要なのは、「具体的な方法を知ること」と、「くり返し練習してしっかりと身につけること」です。「計算力をあげること」や「速く走れるようになること」となら変わりはありません。声を出す方法を知り、練習するためには最適なものが、「音読活動」なのです。

「もっと大きな声で」で、大きな声は出ません

くり返しになってしまっていますが、「もっと大きな声で」「もっとはっきり」と言っただけでは、子ども達の声の出方は変わりません。

音読活動を通して、具体的に指示する必要があります。

● 正しい姿勢で立つ

● 声を出すときの口の形を意識する

● 口を大きく動かす

● 声を届ける相手を意識する

——などがポイントとなります(詳しくは上のまとめ参照)。

子ども一人ひとりの音読の様子を観察し、どこに問題があるのかを見極めた上で、具体的に指導してあげることが大切です。

音読活動の10の観点
基本は「声づくり」と「きまり」

一方、国語的に見ると、詩に使われている技法とその効果を知ることが大切です。「悲しさ」を感じる詩であれば、どのような技法によってそう感

音読のための「10の観点」

「声づくり」の観点	口形
	強弱
	速度
	リズム
	群読
	声で表現
「きまり」の観点	分担当読み
	音読対話
	技法と効果
	創作

じるのかを明らかにした上で、読みの工夫に結びつけたり、自分の表現や創作活動に生かしていきます。

詩の音読という情緒面ばかりが強調されがちですが、このように、非常に論理的な面もあるのです。私はこれを「きまり」とよんでいます。

音読活動を行う場合は、その作品の特徴から、「声づくり」と「きまり」のどちらに重きをおいて指導するとよい作品なのか、その作品を音読するとき、子ども達に何を意識させるとよいのかといったことを見極める必要があります。

右の表は、ひとつの作品を音読させるときの指導のポイントとなる「観点」をまとめたものです。音読活動の際、参考にしてください。

音読活動実践校紹介

東京都・ 三鷹の森学園 三鷹市立高山小学校

東京都の西部・三鷹市の市立高山小学校では、週に2回、朝学習で「ことばの時間」と題し、全校で音読活動を行っています。子ども達の言葉の感覚を育てるのと同時に、授業中の発言に対する積極性にもつながっているといえます。この日は、5年2組(担任・横山健悟先生)にお邪魔しました。



ペアをつかってお互いの音読を聞き合う「音読対話」。相手を意識することで声を出すことへの意識が高まる。お互いに音読し合ったら相手の音読詩集にサインをし、ペアを変える。「あまり近づきすぎないで。すこし離れて、声を届ける練習をしよう」と先生からのアドバイスも。



山田今次の「あめ」の詩では、クラスを4つのグループに分け、グループごとに読み方を工夫させた。1行ごとに読み手を変えたり、少しずつ読み手を増やしたりするなど、それぞれの「あめ」を表現。5分ほど練習した後、クラスみんなの前で発表。聞き手も「自分達の考えた読み方とどう違うんだろう」と真剣。



school data

東京都・三鷹の森学園 三鷹市立高山小学校
校長◎柳瀬泰先生 教職員数◎70名
児童数◎873名 東京都三鷹市牟礼4丁目6番12号
<http://www.mitaka-schools.jp/takayama-es/>

安心して発言できる
クラスを音読でつくる

子ども達が声を出すことに抵抗を感じなくするためには、もうひとつ大切なことがあります。聞く側の姿勢です。

「みんなに笑われるんじゃないか」「バカにされたらどうしよう」といった恥ずかしさや心配が、声をしっかりと出すことを躊躇させるのです。高学年では変声期の影響でその傾向が強くなります。

もし、読み間違いや、うまく読めないことを笑ったり、からかったりする子どもがいたら、厳しく指導しなければなりません。

音読活動で行うことは、「読む」とだけでなくありません。友達の音読を「聞く」ことも大切な要素です。安心して「聞いてもらえる」ことがわかれば、発言することに対するハードルもぐっと下がります。

「まとまりがなくて困っている」といった学級を見ると、「友達の話聞く」という基本動作ができていないことがよくあります。反対に、「聞く」とができるクラスでは、子ども達一人

2019年春 新刊!

監修

工藤 直子 童話作家・詩人
白石 範孝 明星大学教授

工藤直子さんからの、
子ども達への
メッセージから始まります。

音読の楽しさを実感できる
音読詩集です。
声を出して読むことの楽しさ、
言葉のおもしろさを実感できます!

「声づくり」と「きまり」で
構成されています。
・声づくりでいきいきとした学級づくり
ができます!
・詩のきまり(技法・効果)をとらえ
深い表現ができます!

先生方が指導しやすい
音読詩集です。
・わかりやすい「指導の手引き」
(小冊子)つき!
・古典作品には範読用音源を用意!
(QRコードで簡単アクセス)

- 学校納入定価 360円(税込)
- A5版、64ページ、オールカラー
- 1年 おひさま 2年 ほしぞら
- 3年 こもれび 4年 かがやき
- 5年 きらめき 6年 ともしび

新しい音読詩集が誕生します。



濁音、半濁音という用語や、句読点の効果など、国語としての学習にもつながります。



全員で読んだり、指名された一人が読んだりなど、様々な読み方を行うことで、子ども達も適度に緊張感を持続することができています。「この人『音読名人だな』っていう人を推薦して」といった投げかけも。友達どうして認め合う空気が醸成されます。



ひとりが自信をもち、落ち着いていきます。
このことは、音読活動や発言の場面に限ったことではありません。日常生活の中でも、安心して自分の考えを伝え、聞いてもらうことができれば、子ども達の心も安定します。学級経営のための基礎的な習慣づくりが、音読活動の中に含まれているといえるのです。
朝学習や授業の冒頭などちょっとした時間で行うことのできる音読活動は、子ども達の国語力だけでなく、発言力や自信の向上、さらに学級づくりにも結びついているのです。

